

新旧の作曲スタイルを織りませ、それらの融合と衝突を核とする作品が近年のアメリカには多い。このところナクソスから立て続けにリリースされているボルコムはその流れの代表的存在だろう。このCDでも廣南音楽と、ラグタイムをはじめとした北南米のポピュラー音楽への強い関心が聴ける。チエンパロやハルモニウムも入った《ケース裏の表示は誤り?》力作《フレスコ画》では、それぞれの楽器の音色がバロックなり教会の文脈を漂わせるだけに、作風対比がよりはっきりとする。冷ややかな多様式並列と強い表現欲求が不思議な調和を保つ作品だ。ドビュッシーやシエーンベルクが引用されたソナタも、素材むきだしに力強さと、曲としての統一感との葛藤のようである。旧約聖書の創世記を題材にしたというラグタイムとケークウォークは、タップダンスの響きもそのままに、アメリカ的楽観主義が聴者を楽しませるだろう。息のびったりあったデュオの爽快な一枚だ。

Bolcom, William



ウィリアム・ボルコム：2台ピアノのための作品集
(思い出、フレスコ画、1楽章のソナタ、インターラード、サーバント・キス、エデンの門を過って(ケークウォーク))

エリザベス・バーグマン、
マルセル・バーグマン
(p)
〈録音：2005年1月〉
[Naxos]8.559244